

アトランタ・パラリンピックに向けての 身体障害者自転車競技・大阪大会

井上重則

昨年12月、立川の昭和記念公園で、日本で初めての身体障害者自転車競技大会が、第7回車椅子マラソンの前座的なスタートながら（開催決定が遅れ、車椅子マラソン大会に便乗させてもらったのが実情）も開催された。それに引き続いて、関西地区においても、3月20日にKCSC（関西サイクルスポーツセンター）の400mバンクで、無事に実施された。

昨年度、各メーカーの協力と、ご厚意によって新たに作製された三輪車や、タンデムを始めとする身体障害者用の自転車を、全国の各身体障害者スポーツ施設に貸与して、今年度から、選手の育成をしてもらおうという事業が、いよいよスタートするわけである。

そのため、この大会の前日に、全国各地の身障者スポーツ施設関係者にお集まり頂いて、自転車の取り扱い説明をするという講習会が、実施された。その講師を務めたのが、私の本業であるが、正直なところ細々としたメカの話のすべてするには、時間不足であり、ハード抜きで周辺ソフトばかりの3時間というのは、いささか長過ぎるところであった。

しかし、自転車をあまりご存じない方を対象に、自転車の「イロハ」を教えるというのは、考えようによっては、ほとんど実施されたことがないはずであり、今まで以上の範囲に自転車の普及を考えていく場合、今後の課題として検討しておく必要がある問題であろう。

さて大会当日は、ボランティアで協力を買って出て頂いたN工のY氏を中心に、参加選手に合わせた調整が実施されていく。ほとんどの参加選手が、自転車には乗れるものの、スポーツ車と名のつく物は初めてというところから始まり、様々の障害に合わせた、各種の改良（片手

の方のために、すべてのレバー操作が片側で行える、義手とハンドルのマッチング等）という大問題は今後の課題として、選手、各地の身障者スポーツ施設関係者が、三位一体となって、自転車の調整が続く。

全国屈指を誇る、まとまりの良い大阪の競技関係者や、KCSCの協力体制の下で、不慣れな各選手達も、初めてのバンクで三々五々、それぞれに練習を始める。初めはおっかなびっくりの様子で通過していたカントにも、何回か周回を重ねるに従い、見る見る慣れてきて、かなりバンクの上まで登って行く選手も出てくる。

しかし何と言っても、感激したのは、戻ってくる選手の表情の明るいこと。本当に心底、嬉しそうな表情が、たまらない。いささか青臭いが、この笑顔を見ていると、今回のような手伝いをしてきた苦勞が、むくわれるというものである。

タンデムということで、少し高めに入れた空気圧と、当日の天気の良いさでかなりバンクの温度が上昇してきたこともあいまって、タイヤのバーストが2件続くハプニングもあったが、それ以外は大きなトラブルもなく、出場選手が、それぞれに練習を終了する。

大会の進行も初めてのことで、各競技の進行予定時間が分からずに、いささかハプニング続きではあったが、さすがに噂通りの、大阪の競技関係者の皆さん、臨機応変な対応で、多少の乱れはあったものの、スムーズに進んでいく。記録的には、まだヨチヨチ歩きを始めた段階であろうが、何年か先が楽しみである。改めて、関係者各位のご尽力に、この場を借りてお礼を申し上げる。

（写真提供 KCSC 池本元光氏）

（筆者、品質構造研究部主任研究員）

